

# 共生の実相

## 命の線引きを問う

「礼儀正しい子だったけどねえ…」。相模原の障害者施設殺傷事件で起訴された植松聖被告(29)について、近所の住民はため息を漏らす。「あの『さどくん』がね。今でも信じられないよ。現場に近い自宅は事件後、空き家の状態で両親の姿も見かけないという。

今年2〜4月、被告に3回接見した日本障害者協議会の藤井克徳代表(70)に同行取材した。「よろしくお願います」とあいさつし、人の目を見て話す姿は今でも「さどくん」と呼ぶ住民の言葉通りに思える。

だが事件に関する話で印象が一変した。狙ったのは身体、視覚、聴覚の障害者ではなく「意思疎通ができない人」と強調。事件後「心失者」という呼び名を自ら考案したという。長く接見を続ける月刊誌「創」の篠田博之編集長(67)は「事件前からの深い考え」といふより、接見者らに自説を繰り返すしな

# 弱者の差別 後付けの論理

が主張を整理し、論理を組み立てたようだ」と指摘する。

目が見えない藤井さんは教育現場や作業所で、自ら障害者支援に取り組んできた。その経験から、重度の障害がある知人について語り「言葉はなくても心はある」と諭した。だが、被告は



植松聖被告との面会を終えた藤井克徳さん(右)と篠田博之さん(左)2月、横浜市港南区の横浜拘留支所前

## ② 相模原障害者施設殺傷

「迷惑。支援を受けながら『幸せ』と言われても困ります」と聞き入れない。

3月の接見。「どんな考えでも、人命を奪うことは許されないと語り掛けた藤井さんに、被告は「人ではないので。では何なのかとの問いには「動物以下」。そして記者の目をじっと見つめ「当然です」という風にならずいた。ナチス・ドイツの障害者「安楽死」政策の現場となったガス室の光景が不意に脳裏をよぎり背筋が凍った。

一度だけ、被告が体を揺らして笑ったことがある。パーティーでパンダの着ぐるみを着た時の話。人気者になっ



相模原障害者施設殺傷事件 2016年7月26日未明、知的障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者の男女19人が刃物で刺され死亡、職員2人を含む26人が重軽傷を負った。殺人罪などで起訴された元職員植松聖被告(29)の裁判員裁判初公判は来年1月8日に開かれ、3月末までに判決に至る見通し。事件現場の居住棟は建て替え工事が進み、21年度中に新施設が開設される予定。

たが、脱いだ瞬間に一転し「(場が)しらけちゃった」。被告は自嘲的に笑った後、急に真顔になり、続けた。「恐ろしかった。やはり見た目が大事です」。医療脱毛、整形、入れ墨…。自分なりの美に執着する一方、弱い者への差別心を募らせたのだろうか。

藤井さんは「社会防衛のために社会保障費を減額せよ」との主張だが、言葉数も少なく、話は深まらない。正直拍子抜けした。だが、まだ何か底が知れない感じもする」と印象を語る。引き続き対話を求めているが、4月以降は手紙に返信が来なくなった。

藤井さんは、来年1月に始まる公判が、成育歴などを含め、事件に至った被告の個別要因を説明する場となるよう期待する。一方で「事件に影響した社会的な要因、背景とは何か」という問いは発生からの3年、深まらなかつたと感じるという。「殺害されたのが障害者でなかったら、こんなに早く風化しただろうか」